



Title	シュリンク・シュランク・シュリンキング：縮小の「前」と「後」
Author(s)	矢守, 克也
Citation	災害と共生. 2020, 4(1), p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77174
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シュリンク・シュランク・シュリンキング

—縮小の「前」と「後」—

How can we shrink wisely?

—The controversy between “expansion” and “shrinking”—

矢守克也¹

Katsuya YAMORI

要約

社会の縮小（シュリンク）に関するこれまでの思考や実践の多くは、それが完了した状態〈シュランク〉に注目し、発展・成長・達成という形式での完了——ユートピア——と縮小・衰退・消滅という形式での完了——ディストピア——とを対峙させる作業に終始してきた。それに対して、本論文では、その現在進行形〈シュリンキング〉に焦点をあてた。災害復興の基本指針として、従来の Build Back Better（拡張・発展的復興）に対して、Save Sound Shrink（縮小・楽着的復興）を対置し、現在を、発展・成長・達成が完了した未来の時点展望しながら見るのではなく、縮小・衰退・消滅が完了した未来の時点から遡及的に見ることの必要性を強調した。その上で、「まだ」来ぬ、したがって、「まだ」防ぎうる縮小・衰退・消滅を、あえて「もう」完了したものとして受けとめる「デイズ・アフター」の視点を導入することで、現在のコンサマトリーな機能を再浮上させるとともに、縮小・衰退・消滅と正面から対峙するインストゥルメンタルな機能にも好影響を与えようとする実践についても紹介した。

Abstract

Conventional research on a shrinking society (population decline) has mainly focused on a controversial choice between “expansion (or utopia)” and “shrinking (or dystopia).” This paper, in contrast, focuses more on the shrinking process, by considering how we can shrink wisely. For this purpose, we propose a new disaster revitalization principle in a shrinking society, called Save Sound Shrink (SSS), replacing a standard and dominant principle, called Build Back Better (BBB). In the SSS, we retrospectively look for guidance to adjust to a shrunk society in the future. Conversely, the BBB seeks to adjust to the present demographic trend by expanding society in the future. This paper also introduces a new narrative mode, called the “Days-After” mode, in which people are intentionally guided to talk about “not-yet-come” (future) drastic social shrink, as if it “has-already-come,” in order to magnify and reinforce both “instrumental” and “consummatory” functions of the present shrinking society.

キーワード: 縮小、災害復興、拡張・発展的復興、縮小・楽着的復興、デイズ・アフター

Keywords: shrinking society, disaster revitalization, Build Back Better, Save Sound Shrink, Days-After

1. プラスなのか、マイナスなのか、中間なのか

社会やコミュニティのシュリンク（縮小・縮退）については、何のシュリンクなのか——人口なのか、経済・産業活動の水準なのか、多様な社会サービスのレベルなのかなど——も、もちろん問題ではある。しかし、そもそも、シュリンクを、何らかのマイナスの帰結をもたらす事象、つまり、食い止め回避すべき事象としてとらえるのか、それとも、頭から忌避すべき事象ではなく、考えようによっては何らかのプラスの帰結をもたらす事象としてとらえるのか——この対照が、まず重要な考慮ポイントとなる。

この対照ポイントについて、前者に傾いた議論として、「限界集落（限界自治体）」（大野, 2005）、「地方消滅」（増田, 2014）といった言葉によって代表される問題提起がある。たとえば、「縮小ニッポンの衝撃」（NHKスペシャル取材班, 2017）は、日本の総人口について、急速な増加から急速な減少へと転じる転換点にあると指摘した上で、次のように描写している。「ジェットコースターで言えば、スピードがゆっくりになり、これから先の凄まじい急降下を予感させる不気味な『静』の時間だ。この先には、目もくらむような断崖絶壁が待ち受けている」。

*1 京都大学防災研究所 教授・博士（人間科学）

Professor, Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

こうした落下や転落のメタファーの背後には、社会やコミュニティの活動水準は基本的に拡大または維持されるべきで、縮小、まして消滅は絶対に避けるべき事態だと断じる思想がある。

他方で、後者を志向する議論もある。前者の見方の一面性を拒否・批判しつつ(山下, 2012; 2014など)、「田舎暮らしのすすめ」、「田園回帰」(たとえば、小田切ら, 2016)、「里山再生・里山資本主義」(たとえば、藻谷・NHK広島取材班, 2013)などを目標として掲げる立場である。近代産業社会が進化から爛熟へと変質する中で、自然と人間との関係が共存・調和から搾取・利用へと大きく傾いた。自然に対して極端に肥大化した人間は、人間自身だけでなく自らの母体たる自然そのものにも回復不能なダメージを与えようとしている。よって、人間活動の水準は、全体としてむしろシュリンクすべしとする考えである。こうした考えのベースには、消滅はともかく、少なくとも縮小は歓迎すべき望ましい方向だとの認定がある。

そして、これらの両極の調停を志向する中間形ないし折衷形として、「サステナビリティ(持続可能性)」、「コンパクトシティ/縮小都市」(たとえば、矢作, 2014、谷口ら, 2019)、「定常型社会」(広井, 2001)、「シュリンキング・ニッポン」(大野, 2008)、「都市をたたむ」(饗庭, 2015)といったフレーズおよび著作群を位置づけることができる。こうした考えのベースには、過密と過疎、集中と拡散、増加と減少、巨大と極小、発展と停滞——これらの両極端の中庸・中道にこそ、日本社会の将来像を構築すべしとの認識がある。

2. 縮小の「後」ではなく「前」

しかし、本論文では、シュリンクについて、上述の百家争鳴が形成する論争の星座にはおさまらない視点を提示しようと思う。どういうことか。一言で言えば、前節で概観した論戦はいずれも、縮小が完了した「後」の社会の構想に関して展開されている。これは、シュリンクの完了後を扱っているという意味で〈シュランク〉に関する考察である。それに対して、本論文が光を当てるのは、縮小や消滅の途上にある社会、ないし、縮小や消滅を「前」にした人間や社会が示す反応に関する議論である。これは、シュリンクが現在進行形で進みつつあるという自覚、もしくは、シュリンクを目前にすることが人間や社会に与える正負の影響について扱うという意味で〈シュリンキング〉に関する考察である。

「シュリンク・シュランク・シュリンキング」——つまり、縮小(シュリンク)に関して、〈シュランク〉(縮小した後の姿)ではなく〈シュリンキング〉(縮小の過程)について考えることが重要なのは、一つには、目下生じている多くの社会的課題が、縮小や消滅自体(言い換えれば、〈シュランク〉した後の状態)というよりも、何ごとかが小さくなり消えていくことを目前にし、その局面に——少なくとも近現代史上——初めて現実的に向きあうことになった現代日本社会が示す一種の「悪あがき」に由来するように見えるからである。これは、現代社会の特徴を、ベックの「リスク社会」論を念頭に、「危機をむりやりに突破しようとする行動自体が、新しい危機を誘発する」点に認める見田(2018)の理解ともシンクロしている。ここでは、この点を、災害復興というコンテキストにおいて的確についた重要な論考として、宮本(2019)を引いて議論を前進させよう。

宮本(2019)は、人口減少が進み、社会資源が縮小する時代に、大きな災害が頻発すると、人びとが被災地の現状そのものを受け入れないで、「見なかったことにする」、言い換えれば、被災を集合的に否認することがあると警鐘を鳴らしている。ここで、より深刻だとして告発されているのは、復旧・復興のためのリソースが縮小していることが直接的にもたらす課題(雑駁に言えば、ニーズが100でリソースが30のときに、70が支援から漏れるという課題)ではない。そうではなく、縮小を「前」にして生じる諦念・悲観・放漫を基調とする社会的リアクションがもたらす課題(ニーズそのものを「見なかったことにする」ので、30にも支援が届かないことまで生じる)である。〈シュリンキング〉、特に、現在、日本社会が直面している急激で強烈な縮小やその予感、たしかに、人びとや社会を大きな不安に誘う。宮本(2019)はそのネガティブな副次的効果に的確に光を当てている。

しかし他方で、そうとは限らない点も重要である。つまり、何ごとかが縮小し、消滅していくことが実感され予感されているとき、そのことでかえって、そうでなければ生まれなかったような、その対象に対する愛着・思慕・尊重などを基調とする社会的リアクションがもたらされる場合もあるのではないか。

〈シュリンキング〉は、上述した「悪あがき」だけでなく、言ってみれば「かがやき」¹をも喚起する場合があるのではないか。死に往く人やそれを看取る人にだけ訪れる特別に濃厚で深い時間がたしかに存

在するように——。

要するに、本論文では、シュリンク（縮小）について、前節で略述した〈シュリンク〉に関する論争、すなわち、縮小の「後」はユートピアなのか、それともディストピアなのかをめぐる諸説紛々とは一線を画し、〈シュリンク〉、すなわち、縮小を「前」にして、また縮小を現在進行形で生きる人びとや社会に生じうる現象、あるいは、それらがもたらす正負の効果に焦点を当てる。

具体的には、第1に、宮本（2019）の指摘を起点として、現時点で、災害復興の代名詞とされている **Build Back Better**（BBB：拡張・発展的復興）の思想に対して、**Save Sound Shrink**（SSS：縮小・楽着的復興）と銘打った新たな思想を対置する（3～4節）。第2に、非常に深刻な災害想定を突きつけられた町——言わば、近未来の縮小や消滅を予言されてしまった町——で筆者らがスタートさせた「未来へのメモワール（たいせつなもの美術館）」という試みを通して、〈シュリンク〉のポジティブな部分を引き出そうとする実践研究について紹介する（5～7節）。最後に、縮小・消滅を基点にした思想という観点から、論文全体を総括する（8節）。

3. 「復旧・復興」が死語になる社会

矢守（2020）は、近年の被災地の復旧・復興に関わる諸データを通覧しながら、日本社会から「復旧・復興」という言葉が消えてなくなるかもしれないとの懸念を表明している。被災直後の状態そのままに放置された家屋が数多く存在する、復旧・復興工事の入札の相当数が業者不足のために不調に終わる、復興公営住宅の建設工事が数ヶ月単位で遅延する——こういった事象が決して珍しくないのだ。こうした事実のいくつかは、縮小社会にあって、復旧・復興事業に投入できるリソースが端的に不足しているために、言いかえれば、社会のシュリンクそのものが原因となって生じている。しかし、より根が深いのは、2節で宮本（2019）を引いて指摘したタイプの現象、すなわち、シュリンクの予感が生む集合的否認（「見なかったことにする」）によって生じる復旧・復興の遅れである。

ところが、こうした憂慮すべき実態とは対照的に、**Build Back Better**（BBB：拡張・発展的復興）、あるいは、創造的復興、「（単純な）復旧ではなく復興を」など、復興をめぐる提唱されるかけ声は非常に勇ましく、放置された被災地との落差はあまりに

大きい。もちろん、**Build Back Better**に評価すべき点はある。そこに前向きな発想が含まれていることはたしかだ。国連が示した防災ガイドライン「仙台防災枠組」で掲げられた**Build Back Better**は、平成27年版防災白書によれば、次のように定義されている。

「災害の発生後の復興段階において、次の災害発生に備えて、より災害に対して強靱な地域づくりを行うという考え方」（内閣府, 2015）。

上の定義にみる「より」というワードに、前向きで進歩的な姿勢が込められている。津波、洪水などのリスクが明らかに高い地域に、まったく元通りに家屋や地域社会を再建する前に、一度立ち止まって再考し、以前の状態よりも望ましい形での復興プランを考えてみよう。それは、たしかにもっともで、十分うなづける話である。さらに進んで、従前のしながらみから被災前には手をつけることができなかったが、被災を契機として解決が容易になる課題もあるかもしれない。しかし、有り体に言って、それらが意味をなすのは、「元通りにしようと思えばできる」場合に限られるのではないか。ところが、今、起こっているのは、縮小社会の現実やそれを目前にした萎縮や無力感、あるいは、放漫や自暴自棄によって、元通りにする力や旧状回復しようとする気力が失われているという由々しき事態である。

この不具合やぎこちなさ——元通りにすらできないのに**Build Back Better**を志向する——は、シュリンクという社会全体のトレンドと復興哲学のミスマッチに由来している。縮小社会の中で、これまで通りの拡大主義、すなわち、**Build Back Better**を墨守しようと思えば、そこに当然無理が生じる。「集合的否認」とは、まさに、この意味での無理のあらわれである。フロイトを持ち出すまでもなく、「否認」とは、自己防衛反応（自己正当化）の一種である。一方に、元通りにすらできないというリアルな現実があり、他方に、「私たちの復興哲学は拡張・発展です」があるとき、両者を無理矢理両立させようと思えば、現実自体を「（見）なかったことにする」ほかない。しかし、これはおよそ前向きな態度とは言えない。現状回復すらできない現実を見て見ぬふりしてやり過ごし、旧態依然たる復興観にしがみつくのではなく、縮小社会にふさわしい復興像を新たに模索すべきであろう。

当然のことながら、上記のミスマッチに対して、元通りにできないという現実を否認するのではなく、復興哲学の方を変更して不整合を解消するという方向性もありえる。言うまでもなく、その方が望まし

いだろう。しかし、それにしても、**Build Back Better**（拡張・発展的復興）に対置し、それを代替・補完する復興像はあるのだろうか。筆者は、ある、と考える。

4. Save Sound Shrink（縮小・樂着的復興）

作家の高村薫氏は、40代で経験した阪神・淡路大震災と60代で経験した大阪府北部地震との違いについて、被災後の片付けの作業、支援を受けるための種々の手続きなど、前者では容易に無理なくできたことのいくつかが後者ではそうではなかったことを踏まえて、こう書いている。「年をとると基本的に身の周りのどんな変化も重荷になる。…（中略）…できる限り静かに生活のなかに溶かし出して生きてゆくことが、唯一の対症療法だとも言える」（熊本日日新聞社（2019年6月30日付、「くまにち論壇」））。

また、うつくしまふくしま未来支援センターを拠点として、福島県を中心に、主に人口減少地域での災害復興に長く関与してきた天野和彦氏は、福島原発事故後のコミュニティ再生に関する取り組みについて（天野, 2019）、「死にがい」という言葉を用いて次のように報告している。「ここに骨を埋めたい、この家族のために、この仕事のために、ここで死んでよかったと思える集落、全員がそう思っている集落があれば、そうやってみんなが亡くなっていく集落は幸福ではないか」。

これら二つの卓見が示唆していることは、個人、集落、社会などが小さくなること、また消えていくこと——つまり、シュリンク——を、無条件に望ましくなく、回避・阻止し遅延させるべきこととしてとらえるのではなく、そこに幸福や満足を見だし、それを、「死」ではなく「生」のプロセスとして（も）見るべきではないかということである。本論文で使ってきた概念を使ってより丁寧に言いかえれば、〈シュランク〉した状態への評価や対応だけに一喜一憂し、それにすべてを支配されるのではなく、〈シュリンキング〉の充実に目を向ける必要があるということである。この考えは、緩和ケアやホスピスなど、人間の生を、そのクオリティ（Quality of Life）を重視しつつ、尊厳ある生としてクロージングするための支援について思考し実践しようとする動きとも軌を一にしている。

要するに、筆者なりに、天野氏の言葉をさらに敷衍するなら、われわれが真に恐れ回避すべきは、死そのもの——つまり、人が亡くなり、集落が消滅すること——ではない。「生きがいの喪失」ならぬ「死

にがいの喪失」こそが最大の課題である（なお、「死にがい」については、井上俊氏による名著（井上, 1973）がある）。〈シュランク〉（消滅）した「後」が、「死」であることは定義上事実だから当然として、むしろ、〈シュリンキング〉が「死」に近いものになってしまっていることを憂慮すべきだということだ。なんとなれば、〈シュリンキング〉は、人や社会がまだ「生」を生きている間に起きることだからである。これは、尊厳死・安楽死について、安藤（2019）が、「『悪い死』とは、実は『悪い生』なのだ」（p.37）と喝破していることにも通じる。

それにもかかわらず、現実には、人口（定住人口にせよ、交流人口にせよ、関係人口にせよ）や経済成長率を**Build Back Better**（BBB）の基準として設定した上で、復興とは、「基準」となるインデックスの旧状回復のことであり、できれば増加に転換せしめることだから、たとえば、人口減少に拍車がかかるのは復興の落第生、いわんやゼロになるなどもつてのほかで、それは復興として完全に失敗（死）だ——こう断じる考え方が支配的である。〈シュリンキング〉は、〈シュランク〉という失敗（死）への途上にあたるから、その中身を問われることなく、無条件にダメ出しされているのである。

しかし、この思考のパラダイムこそが、災害による衝撃や次々に襲ってくる変化を「できる限り静かに生活のなかに溶かし出して生きてゆく」という選択肢を被災者から奪い、「生きがいの喪失」だけでなく「死にがいの喪失」をもたらしている場合があることに思い至るべきである。災害のダメージを受けながらも、「災害に見舞われはしたが、ここでの暮らしは楽しかった。次に生まれるときも、この家族に、この集落に、この社会に生まれたい」。多くの住民がこのように振り返りながら人生の幕を下ろし、また、穏やかに一つの集落が終焉のときを迎えること、また、そのような形で〈シュリンキング〉し消えていくことも、——特に縮小社会においては——立派で望ましい復興ではないか。

もともと、素朴で無邪気なBBB路線には、本小論を待つまでもなく、すでに批判が集中している。批判の中核に据えられてきた概念の一つが「レジリエンス」（resilience）である。たしかに、「レジリエンス」は一步前進ではある。しかし、筆者の見るところ、たとえば、「ナショナル・レジリエンス」というフレーズや、いったん落ち込んでその後「V字回復」を果たすお馴染みの図式とともに論じられるレジリエンス、つまり復旧・復興の効率化と同一視された

レジリエンスは、BBBの代替ワードの域を出ていない。また、「bouncing back（第1世代）からbouncing forward（第2世代）」の流れ（Atallah, 2016）における「forward」の含意にも、一部BBBとの混線が感じられる。

他方で、「ジェンダー、エスニシティ、文化等の“多様性”を尊重、“トップダウン”ではなく“ボトムアップ”な形で復興の当事者の“エンパワーメント”を重視して、柔軟でしなやかな復興を」（Atallah, 2016）と呼びかけるレジリエンス第3世代の看板フレーズには共感できる。しかし、それでも、——先に触れた「田舎暮らし」や「田園回帰」などと同様——そこには、「それなりの回復」、「それぞれの定常」が想定されていて、何人たりとも、また、いかなる社会も避けることのできない「消滅（死）」を覚悟をもって受容し、それを明示的に取り込んだ〈シュリンキング〉像を提示するだけの思考の透徹性には欠けているように思われる。

矢守（2020）は、上の意味での〈シュリンキング〉を直視した復興哲学を、Build Back Betterの向こうを張って、Save Sound Shrink（縮小・楽着的復興）と呼ぼうと提起している。Save Sound Shrinkには、お仕着せの基準をたてに復興の「成功・失敗」を言い募って、かえって事態を悪化させ、社会を「落着」させてしまうのではなく、たとえ、集落から人の姿が消えるとしても、被災者の生が静かに充実するなかで復興過程が「楽着」していく——そのような、〈シュリンキング〉そのものを豊かにすることを第一義とする方向を目指すべきではないかとの主張がこめられている。

Save Sound Shrinkだけが唯一絶対の方向性だと強弁する意図はない。ただ、アカデミズムの世界にあっては、Build Back Betterや「レジリエンス」というホットワードに右に倣えと無反省に飛びつくのではなく、それぞれの社会の歴史・現在・将来をよく見据えて、それにふさわしい復興哲学を構想すべく智恵を出し合う努力が必要なことだけはたしかである。

5. 「未来へのメモワール」——「消える」と予告された町で——

高知県黒潮町は、2011年に発生した東日本大震災を受けて見直された南海トラフ地震による津波想定で、日本で最悪の34メートルもの高さの津波が襲来するとされた自治体である。そうでなくても、過疎高齢化という縮小の長期トレンドにすでに突入して

いた町にとって、この想定は、最後通告に近い意味あいすらもっていた。実際、この政府想定公表直後に発行された週刊誌には、「町が消える」との衝撃的な見出しが踊っていた。この後、黒潮町は、狭義の災害対策に迫られるのはもちろん、「そんなアブナイところに観光には行けない」、「安心して子育てできない」、「工場の撤退・移転を考えざるを得ない」など、観光、教育、経済・産業など多方面にわたって深刻な状況に直面することになった。まさにシュリンクに拍車がかかることになったわけである。

筆者は、この黒潮町で長年にわたって、地域住民、役場職員などと共同で、防災・減災対策を担ってきた。防災・減災対策であるから、当然のように、そして何度も、地震・津波の破壊力について住民に伝えてきた。「最大30メートルを超える高さの津波がやって来るかもしれません、震度7の地震動も強烈です」、「家具は固定しましょう、避難訓練と一緒にやりませんか」などと。

山有り谷有りの十年近くにわたる長期的な関与をベースにしたアクションリサーチを通して、一定の成果を上げてきたとの自負もある（矢守, 2017）。しかし他方で、災害の脅威を強調するだけのアプローチ、言い換えれば、近い将来に予想される大規模な縮小、下手をすると消滅を予言することの限界も感じるようになった。特に、災害リスクをダイレクトに伝えたと、これまで指摘したように、〈シュリンキング〉の過程を大きく損なう場合があるように思えた。人びとの前に突如現れた強烈な災害リスクは、一方で人びとを脅えさせ、他方で諦めさせ、また、別の場合には「見なかったことにする」といった後向きの反応を多数生むことに次第に気づいたのである。

そこで、筆者らが新たに打ち出したのが、「未来へのメモワール（たいせつなもの美術館）」というプロジェクトであった（矢守・杉山・小西, 2019）。このプロジェクトは、大きく分けて二つのステージから成る。聞きとりのステージと展示会のステージである。聞きとりのステージでは、地域住民に「仮に大きな災害に襲われたとして、あなたが未来に残しておきたい大切なものは何ですか」と問いかける。問いかけに対して、実に多様な回答が返ってきた。父親の写真、コンクールに入選した作文が掲載された文集、集落自慢の冷泉、昔の田植えの道具、学校の食堂の××定食、家族との会話、「みよちゃん」（集落の人気者の女性の名前）…。

次に、展示会のステージでは、聞きとりで示され

たものや出来事（それに関連する写真）を収集し、それらを展示した（図1）。展示品を見ることで、観覧者の間に「そうそう、こんなのあったね」と、黒潮町での生活やその歴史をめぐるやりとりが生まれることもあった。「私なら、××を選ぶ」と、「たいせつなもの」について自分なりの考えをめぐらせてくれる人もいた。さらに、この取り組みを契機として、選びとった「たいせつなもの」を安全な場所へと移した人もいた。

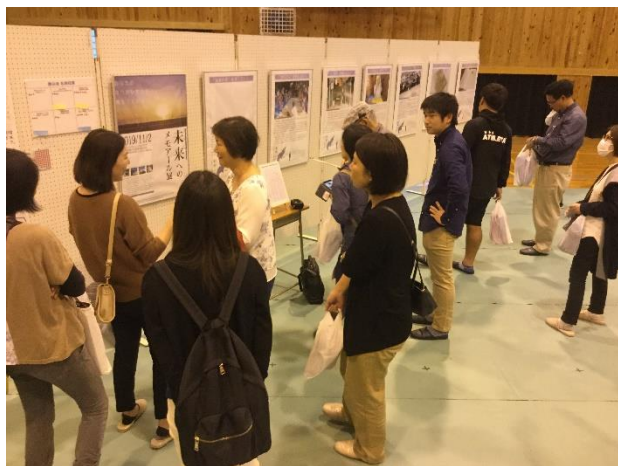


図1.「未来へのメモワール展」の様子
（高知県黒潮町にて）

6. 「デイズ・ビフォー」と「デイズ・アフター」

「未来へのメモワール」の意味、特に、それが〈シュランク〉ならぬ〈シュリンキング〉のベターメントに及ぼす意味について考えるためには、少々準備が必要である。本節では、考察のために必要な概念を整理する。なお、ここで導入する2組の基幹概念、すなわち、「デイズ・ビフォー」と「デイズ・アフター」、および、「インストゥルメンタル」と「コンサマトリー」に関する詳細は、矢守（2018）を参照されたい。

デイズ・ビフォーとは、「もうをまだとして」感覚する時間の様相である。私たちは、そこに「前・後」の断絶を感じざるを得ない出来事（激烈な縮小、ひいては消滅を結果するシュリンクも一種の断絶であり、具体的には被災もその一つ）を体験すると、二つの意味で「もうをまだとして」を味わうことになる。第1は、たとえば、「せめて補助電源だけでも2階にあげておけば…」（福島原発事故の後に何度も聞かれた言葉）に象徴される感覚で、真木（2003）が言う、今がもつインストゥルメンタルな機能（媒

介・手段的機能）に関連する。今によって未来を変える（断絶ないしシュリンクを回避する）ことができるという点に今の価値を感じつつ、そのシュリンク（災害）は“もう”起きてしまった、しかし、だからこそ、「あのときなら、“まだ”この手も打てた、あれもできた」と痛切に感じる。

第2は、たとえば、『最後だとわかっていたなら』と題された詩（マレック, 1989）に登場する「もう一度呼び寄せて抱きしめただろう」というフレーズに象徴される感覚で、今がもつコンサマトリーな機能（直接・享受的機能）に関連する。同時多発テロ（2000年9月1日）の後広く知られるようになった『最後だとわかっていたなら』は、「あなたがドアを出て行くのを見るのが 最後だとわかっていたら わたしはあなたを抱きしめてキスをして そしてまたもう一度呼び寄せて 抱きしめただろう」（サンクチュアリ出版, 2011）と語りかける。大きな断絶を経験した人は、今——正確には、あのときの今——がそれ自体として、何ものにも代え難い、かけがえのない時間だ（だった）という点に今の価値を感じつつ、そのシュリンク（災害）は“もう”起きてしまった、しかし、だからこそ、「あのときなら、“まだ”もう一度抱きしめられた」と痛切に感じる。

デイズ・ビフォーは、図2で、【C】のポジションにある人が、現実には戻ることのできない【B】という今に、それでも回帰してしまう様相にあたる。ここで銘記しておくべき重要なことは、この時間感覚が、一方で、後悔、無念やサバイバーズギルトなど、大変辛い感情をもたらすのと同時に、他方で、後知恵など生産的な一面をも有するという事実である。

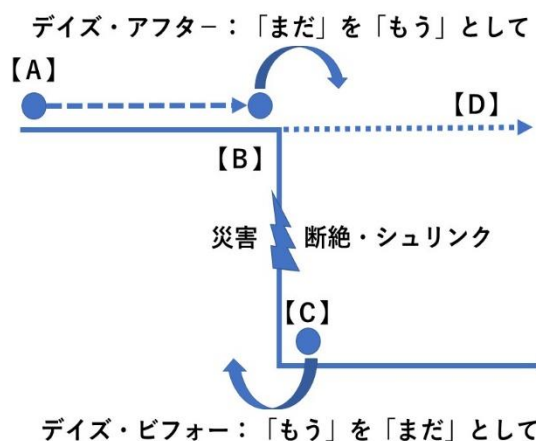


図2. デイズ・ビフォーとデイズ・アフターの概念図

他方、デイズ・アフターとは、「まだをもうとして」感覚する時間の様相である。私たちは、そこに

「前・後」の断絶（急激なシュリンクもその一つだった）を覚悟しなければならない出来事が切迫していると感じると、2つの意味で「まだをもうとして」を味わうことになる。

このことは、デイズ・ビフォーと関連づけると理解しやすい。【C】にいる人が【B】の地点に引き戻されるとき、「もうをまだとして」の2種の効果がもたらされるのだった。そうだとすれば、すでに【B】のポジションにある人（シュリンクという断絶の切迫を感じている人）を、——あるいは、【A】のポジションにある人（ふつうの日常にあって、【D】へとスムーズに移行すると信じて疑っていない人）を【B】に移行させた上でさらに——【C】のポジションに仮想的に立たせることができれば、言い換えれば、まだ来ぬ断絶（シュリンク）をもう経験したかのような感覚を付与できれば、【B】（および【A】）のポジションにある人に、デイズ・ビフォーと同様の二つの効果が生じる可能性がある。

すなわち、第1に、「せめて補助電源だけでも…」に対応して、「今のうちに非常持出袋だけでも準備しよう」といった形で、今がもつインストゥルメンタルな機能を伸長できる可能性がある。また第2に、「もう一度呼び寄せて…」に対応して、「久しぶりに今日は家族で夕飯を食べよう」、「××の浜に夕陽を見に行こう」といった形で、今がもつコンサマトリーな機能を賦活できる可能性がある。

言い換えれば、現在と過去の間にもう生じてしまった断絶（急激なシュリンク）をめぐって生じる「デイズ・ビフォー」を、時間軸上でスライドさせて、未来と現在の間にも生じるかもしれないが、幸いまだ生じていない断絶をめぐって生じる「デイズ・アフター」へと変形できれば、防災・減災活動（インストゥルメンタル：将来の災害に対する備え）、および、日常生活（コンサマトリー：地域社会や日常の暮らしに隠れた価値や魅力の再発見）の双方に好影響を与えることができると予想される。理想的には、この後7節で述べるように、両者が互いに他を高める相乗的な形で。

7. 「デイズ・アフター」の光と陰

「デイズ・アフター」をベースとする「未来へのメモワール」は、〈シュリンク〉ならぬ〈シュリンク〉にとってどのような意味をもっているのだろうか。

何度も指摘してきたように、強烈な災害リスクの提示、つまり、近い将来の縮小や消滅の予告は、そ

の否定的な効果が実際に表面化する以前に、〈シュリンク〉の過程を損なうという陰の部分をも有する。実際、黒潮町でも、人口流出、観光客の激減、地価の下落などが生じ、これは、その結果として、「疑似被災」（矢守・杉山・小西, 2019）とでも呼べる憂慮すべき事態を招いている。「疑似被災」とは、まだ起こってもいない災害がもう起きたかのように受けとられ、もう起きてしまったかのような状況になっているということである。

だから、「まだをもうとして」を基調とする「デイズ・アフター」による働きかけは、一見すると、こうした負のスパイラルに拍車をかけてしまうようにも思える。ただでさえ、近い将来の縮小に不安を抱いている人びとに、それが「実際にもう起きてしまったと思って下さい」などと持ちかけることは、百害あって一利なしのようにも思える。しかし、そうではない。少なくとも、そうではない側面もある。

通常の災害リスク・コミュニケーションが、〈シュリンク〉の過程にネガティブな効果をもたらすのは、災害による縮小・消滅を、半分確定的で半分未定的なものとして、言わば中途半端に確定的なものとして伝えているからである。「このままではアブナイと言われ、こんな努力を始めたけど、これでいいのだろうか。もう手遅れ、何をしても無駄だと言っている人もいる。いっそきれいさっぱり諦めてしまった方がいいのでは…」。「こうなると、疑心暗鬼の負のスパイラルはとどまるところを知らない。

それに対して、「デイズ・アフター」の鍵は、「まだをもうとして」、言い換えれば、将来の縮小や消滅をすでに完全に確定してしまったものとしてとらえる点にある。縮小や消滅は確定的である。いや、さらに一歩踏み込んで表現すれば、それはすでに現実に起こってしまった既定的な事実であって、もう取り返しはつかない。そのように断定してしまうのが「デイズ・アフター」ということである。このとき、逆説的に、縮小・消滅を目前にしていることが、今の暮らしに陰を落とすどころか、それは反転的に光を放ち始め、あまつさえ、シュリンク（縮小・消滅）自体の回避にも好影響を与えるという逆転が生じる可能性が芽生える。

筆者の考えでは、この逆転劇を可能にするメカニズムは、デイズ・アフターの時間感覚が実現するインストゥルメンタル、コンサマトリー両側面の相乗作用にある。ここで言う相乗作用とは、平たく言えば、こういうことである²。

X：“まさか”（縮小・消滅）を既定的な現実として受けとめるからこそ、“ふだん”が輝いて見える、“ふだん”の暮らしの価値を（再）発見できる

Y：“ふだん”のありがたさ、かけがえのなさを切実に感じるからこそ、“まさか”（縮小・消滅）への備えが覚悟の定まった身のあるものになる

シュリンク（その予感）は、長く成長社会にあった日本社会では、放っておけば、無条件でマイナスの結果をもたらすものと考えられてきた。実際、何ら手立てを講じなければ、「もう希望はない」、「何をしてしても無駄だ」、「見なかったことにする」（2節など）といった陰の側面が噴出しがちである。まさしく「疑似被災」である。だから、私たちは、目前に迫る断絶（シュリンク）を前にして、デイズ・アフターの陰ではなく光をより大きく引き出すために、何らかの意図的なアクションを必要としている。「未来へのメモワール」は、そのための仕掛けの一つである。つまり、それは、上記のXとYの相乗作用、言いかえれば、“ふだん”と“まさか”の間の好ましい弁証法を具体的な実践に落とし込もうとするものである。

「未来へのメモワール」で提示されたものやことの多くは、ふだんは「なんちゃあない」（黒潮町周辺の言葉で、特別何ということはない、という意味）と思われているものである。しかし、私たちの幸福は「なんちゃあない」ものやことにこそ支えられており、しかも、私たちは、日常、その事実をあまり自覚していない。むしろ、それらを、つまらなくて、とるにたらない、場合によっては、面倒なもの（たとえば、親子・親戚関係）、あるいは、田舎くさいもの（たとえば、古くからの作法や流儀など）とすら思っている。そのように感じるのは、それらが決して奪われることなく永遠に存在すると誤解しているからである（図2で、【A】から【D】への進行を自明視しているからである）。この意味で、シュリンク（何ごとかの縮小・消滅、あるいは、その予測・予感）は、「なんちゃあない」ものが有するコンサマトリーな意義に私たちが気づき、それを保全する手段をインストゥルメンタルな意味で講じることを社会に促すための絶好の機会でもある。これこそが、縮小や消滅に真に向き合う人びとや社会にだけ訪れる光である。

8. 縮小・消滅からの眺め

これまで、シュリンクに関する思考や実践の多くは、それが完了した状態〈シュランク〉に焦点を絞った上で、発展・成長・達成という形式での完了——ユートピア——と縮小・衰退・消滅という形式での完了——ディストピア——とを対峙させる作業に終始してきたように思われる。それに対して、本論文では、その現在進行形〈シュリンキング〉に焦点を当てた。特に、現在を、発展・成長・達成が完了した未来の時点展望しながら見るのではなく、縮小・衰退・消滅が完了した未来の時点から遡及的に見るものの必要性について述べたつもりである。これまでの成長社会の中で、私たちは、前者の視点、つまり、成長物語の中に現在を位置づけ、それをプロスペクティブに評価する習癖に染まりすぎている。縮小社会にあつては、後者の視点、つまり、縮小物語の中に現在を位置づけ、それをレトロスペクティブに評価することもきわめて重要である。

これは、成長・拡大を続ける社会だけでなく、縮小・衰退した社会にもそれなりの魅力があるというタイプの議論ではない（それは、「田舎暮らし」礼賛の議論である）。まして、縮小・消滅をどのようにして食い止めようかという話ではない（それは、BBBを無条件に是とする議論である）。今の暮らしを見つめるときの基本的な視座を、成長・拡大から、縮小・消滅、つまりシュリンクに転換してみようとの提案である。「まだ」来ぬ、したがって、「まだ」防ぎうる縮小・消滅を「もう」完了したものとして受けとめることで、今、目の前の現実が違って見えてくる。「なんちゃあない」ものやことのコンサマトリーな価値が（再）浮上する。これだけでも、実践的にも理論的にも意義深いことだが、黒潮町の事例でみたように、さらに興味深いことに、本来、いったん棚上げしたはずのインストゥルメンタルなサイドにも好影響が及ぶ。将来のシュリンクを受容した上で、〈シュリンキング〉を真摯に見つめ直す（縮小し消滅していくものやことに正面から向き合う）と、そこから反転して、縮小・消滅自体を抑止する目も見えてくる。この“ふだん”と“まさか”の弁証法（前節で見たXとYの間の相乗作用）が肝要である。

もっとも、こうしたロジックは、けっして極めて特殊なものというわけではない。4節でも言及したように、緩和ケアやホスピスなど、人間の生のクロージングの領域では以前から実践的な課題として注目されてきた。特に精神の堅調が身体の健康に与えるポジティブな効果がゼロではないことが見いだされ

て以降、そうである。

さらに、近年では、シュリンク（縮小・消滅）から実践や思考を組み立てることの意義は、実践的ないし臨床的な現場だけでなく、アカデミズムの多様な領域へと全面化され論壇でも大きな話題になっている。「破局論」（たとえば、デュピュイ（2011, 2012））、「崩壊学」（たとえば、セルヴィーニュ・スティーヴンス（2019））、「絶滅論」（たとえば、ラウブ（1996）、吉川（2014））などである。書名のおどろおどろしい字面に惑わされてはならない。こうした著作群の眼目は、破局や崩壊や絶滅後の世界（〈シュリンク〉した世界）について想像をたくましくすることにはない。そうではなく、「成長・発展」した地点に向けてではなく、「縮小・消滅」した地点から、この今、つまり、〈シュリンキング〉する社会を眺めることで、私たちが直面する現下の課題に新たな光を当てるのが共通のモチーフになっている。

縮小社会にふさわしい、縮小社会の中でこそ成長する将来性のある議論である。

補注

- (1) ここで「悪あがき」と並置するために、あえて「かがやき」と表現したことの内実を、より論理的に表現するためには、6節で提示する「コンサマトリー」（直接・享受的）という用語を導入する必要がある。つまり、「かがやき」とは、縮小・消滅への実感と予感によって喚起された、今というときが有する「コンサマトリー」な機能への感受性の高まりによって顕在化された、平凡な日常生活やありふれた光景の絶大な魅力、ということになる。
- (2) ここで依拠しているデイズ・アフターの論理、つまり、あえて確定化させた未来が現在にもたらす正の効果は、縮小・消滅（SSS）ではなく成長・拡大（BBB）を志向している社会では、おそらく機能しにくい。たとえば、重大な企ての前に何らかの「成功イメージ」を脳裏に浮かべるなど、「まだをもうとして」とらえる時間感覚を、成長・拡大トレンドの中で前向きに機能させるための社会慣行や経験知も、たしかに存在する。ただし、それは、あくまでも「インストゥルメンタル」な効果である。現在の価値が、未来にやってくる（はずの）達成によって規定される（言いかえれば、現在が未来へと疎外される）という構図は変わらない。いや、未来における成功像をありありと感覚することは、その構図をさらに強めるだろう。それに対して、「未来へのメモワール」における縮小・消滅の確定的先どりとは、達成や成功どころか、言わば、空無（没価値）を先取することである。だから

こそ、現在の価値をそれ自体として享受する姿勢、すなわち、「インストゥルメンタル」から「コンサマトリー」の次元への転回が生じる。以上の意味で、ここで強調している「インストゥルメンタル」、「コンサマトリー」両側面の相乗作用は、成長・拡大（BBB）ではなく、縮小・消滅（SSS）の意識のもとでのみ、その威力を十全に発揮すると推定することができる。

参考文献

- 饗庭伸（2015）．都市をたたく：人口減少時代をデザインする都市計画 花伝社
- 天野和彦（2019）．原発事故後のコミュニティ形成に関する実証的研究——川内村コミュニティ未来プロジェクトの取り組みから 日本災害復興学会2019年度鳥取大会予稿集, 45-48.
- 安藤泰至（2019）．安楽死・尊厳死を語る前に知っておきたいこと 岩波書店
- Atallah, G. D. (2016). Toward a decolonial turn in resilience thinking in disasters: Example of the Mapuche from southern Chile on the frontlines and faultlines. *International Journal of Disaster Risk Reduction*, 19, 92-100.
- デュピュイ, P. J. 嶋崎正樹（訳）（2011）．ツナミの小形而上学 岩波書店
- （Dupuy, P.J. (2005). *Petite metaphysique des tsunamis*. Seuil.）
- デュピュイ, P. J. 桑田光平・本田貴久（訳）（2012）．ありえないことが現実になるとき：賢明な破局論にむけて 筑摩書房
- （Dupuy, P.J. (2004). *Pour un catastrophisme éclairé: Quand l'impossible est certain*. Seuil.）
- 広井良典（2001）．定常型社会：新しい「豊かさ」の構想 岩波新書
- 井上俊（1973）．死にがいの喪失 筑摩書房
- 真木悠介（2003）．時間の比較社会学 岩波書店
- マレック, N.C. 佐川睦（訳）（2007）．最後だとわかっていたら サンクチュアリ・パブリッシング
- 増田寛也（2014）．地方消滅：東京一極集中が招く人口急減 中央公論新社
- 見田宗介（2018）．現代社会はどこに向かうか：高原の見晴らしを切り開くこと 岩波書店
- 宮本匠（2019）．人口減少社会の災害復興の課題：集会的否認と両論併記 災害と共生, 3, 11-24.
- 藻谷浩介・NHK広島取材班（2013）．里山資本主義：日本経済は「安心の原理」で動く 角川書店
- 内閣府（2015）．平成27年版防災白書
- NHKスペシャル取材班（2017）．縮小ニッポンの衝撃 講

矢守：シュリンク・シュランク・シュリンキング

談社

小田切徳美・広井良典・大江正章・藤山 浩 (2016) . 田

園回帰がひらく未来：農山村再生の最前線 岩波書店

大野晃 (2005) . 山村環境社会学序説：現代山村の限界集

落化と流域共同管理 農山漁村文化協会

大野秀敏 (2008) . シュリンキング・ニッポン：縮小する

都市の未来戦略 鹿島出版会

ラウプ, M. D. (1996) . 大絶滅：遺伝子が悪いのか運が悪

いのか？ 平河出版社

(Raup, M. D. (1992). Extinction: Bad genes or bad luck?

W W Norton & Co Inc.)

サンクチュアリ出版 (2011) . 最後だとわかっていたなら

公式ページ

<https://www.sanctuarybooks.jp/saigodato/poem.html>

(アクセス：2020-09-13)

セルヴィーニュ, P・スティーヴンス, R. 鳥取絹子 (訳)

(2019) . 崩壊学：人類が直面している脅威の実態 草

思社

(Servigne, P. and Stevens, R. (2015). Comment tout peut

s'effondrer: Petit manuel de collapsologie a l'usage des

generations presentes. Seuil.)

谷口守・片山健介・斉田英子・高見淳史・松中亮治・氏

原岳人・藤井さやか・堤 純 (2019) . 世界のコンパクト

シティ：都市を賢く縮退するしくみと効果 学芸出

版社

矢作弘 (2014) . 縮小都市の挑戦 岩波書店

山下祐介 (2012) . 限界集落の真実：過疎の村は消えるか？

筑摩書房

山下祐介 (2014) . 地方消滅の罨：「増田レポート」と人

口減少社会の正体 筑摩書房

矢守克也 (2017) . 黒潮町における地区防災計画づくり

C+BOUSAI (地区防災計画学会誌) , 10, 3-8.

矢守克也 (2018) . アクションリサーチ・イン・アクション：

共同当事者・時間・データ 新曜社

矢守克也 (2020) . 災害復興のパラダイムシフト 日本災

害復興学会論文集, 15, 37-44.

矢守克也・杉山高志・小西慶哉 (2019) . 被災地のミュー

ジウム／未災地のミュージウム：“ふだん”と“まさ

か”の弁証法 日本災害復興学会2019年度鳥取大会

予稿集, 25-26

吉川浩満 (2014) . 理不尽な進化：遺伝子と運のあいだ 朝

日出版社